



記 入 日 2015 年 1 月 15 日

1. 概 要

実践団体名	竜南いのち守り隊		
連絡先	(0564) 54-4400 岡崎市立竜南中学校		
プランタイトル	持続可能な地域社会の実現を目指す生徒の育成		
プランの対象者※1	4、8、9、10	対象とする 災害種別※2	1

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント!】

- ・ 地域を大切にし、72時間生き延びるために私たち「中学生」ができることを考える。
- ・ すべての人に優しい防災を考える。
- ・ 考えたことを、力を合わせて実行に移す。
- ・ 学習のまとめを地域に広める。
- ・ 生徒の、生徒による持続可能な地域のための防災学習。

【プランの概要】

- ① 「つかむ」段階 防災講話 防災オリエンテーション NPOとの協働
→岡崎市役所や地域交流施設との協働による学びで、防災意識の高揚
- ② 「さぐる」段階 防災マップ作成 非常持ち出し袋検討
→高揚した意識を一斉学習による探求で「個別の課題」へと高める
- ③ 「深める」段階 東北復興支援訪問 地域防災訓練への運営側参加
教師との協働学習
→個別の課題を解決するための多様な防災学習を実現し、学びを深める
- ④ 「ひろめる」段階 防災フェスタの開催 ユネスコスクール報告会参加
→共有化による地域への貢献



【期待される効果・ここがおすすめ!】

- ・ 個別化（孤別化）から、つながりへの転換の一役を生徒が自ら進んで引き受ける。
- ・ 無理せず、無駄なく、最大限の学びを得ることを目指す。
- ・ 多様な学びに対応するため、教師の特性を生かす。
- ・ 学校という枠で、地域や他団体との協働を目指す。
- ・ 持続可能な地域社会の実現を目指す生徒を一人でも多く増やす。
- ・ 竜南防災カリキュラムを策定することで、一定以上の成果を毎年得ることができる。



2. プランの年間活動記録 (2015 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	学年検討会②	防災講話依頼⑤	①避難訓練
5 月	学年検討会⑤ 地域検討会③ 東北との調整⑦	活動まとめ④	②防災オリエンテーション ③地域交流施設出展
6 月	学年検討会⑤ 東北との調整⑦	東北訪問準備⑦	④ユネスコスクール体験報告会
7 月	学年検討会⑦ 東北との調整⑦	東北訪問準備⑦	⑤防災講話
8 月	学年検討会⑨ 東北との調整⑦	ボランティア準備⑥	⑥地域ボランティア参加 ⑦東北復興支援訪問
9 月	学年検討会⑨	東北訪問報告会準備⑧ D I G 準備⑨ 防災講話依頼⑪	⑧東北復興支援訪問報告会 ⑨防災マップ作り D I G
10 月	学年検討会⑪ 地域検討会⑫	D I G 準備⑨ 防災講話依頼⑪ N P O 支援依頼⑪	⑨防災マップ作り D I G
11 月	学年検討会⑬ 地域検討会⑫	文化祭準備⑩ 防災講話依頼⑪ N P O 支援依頼⑪	⑩文化祭発表 ⑪防災講話 ⑫地域交流施設出展
12 月	学年検討会⑬ カテゴリ調整⑬	カテゴリ準備⑬	⑬～⑱「中学生にできること」 カテゴリ追究活動 ⑲学区防災訓練参加
1 月	全校提案⑳	フェスタ準備㉓	⑬～⑱「中学生にできること」 カテゴリ追究活動 ⑳学習のまとめ
2 月	全校提案㉓	フェスタ準備㉓	㉑防災フェスタ

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： ⑤】※3

タイトル	防災講話「南海トラフ巨大地震に備えよう」
実施月日（曜日）	7月3日（金）
実施場所	体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏名：石川 春男 所属・役職等：岡崎市職員
所要時間または「コマ数×単位時間」	2コマ×50分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	6 防災に対する知識を深める
達成目標	災害の実際や、心の変容を学ぶことで、災害への備えの重要性を改めて感じることができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	①連絡日程調整 ②資料準備 ③講話を聴く ④感想を書く
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・岡崎市役所 市長公室 防災危機管理課 石川春男様 ・パソコン ・プロジェクター ・スライド ・資料
参加人数	195人
経費の総額・内訳概要	0円
成果と課題	【成果】 南海トラフ巨大地震の実際を知ることで、切実感を醸成することができた。次時以降の防災学習に対して意欲的になった。 【課題】 防災についての知識を深めるための講話なので、開催時期を早めにしたおかないと、その後の防災学習がどんどん遅れてしまう。
成果物	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑦⑧⑩】 ※3

タイトル	東北復興支援訪問
実施月日（曜日）	8月24日（月）～26日（水）
実施場所	宮城県亶理町・名取市
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当 講師 氏 名： 生駒大典 荒浜中学校職員 亶理町職員 所属・役職等： 教諭 閑上震災を伝える会
所要時間または「コマ数×単位時間」	60時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 イベント・行事
活動目的※5	3 災害に強い地域を作る
達成目標	ボランティア活動等に参加することで、「主体的に動くことができる」生徒を育成する
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 参加者募集（3倍強の応募者） ② 意識醸成（訪問地調べ） ③ 亶理町立荒浜中学校 ④ 津波被災農地復興支援ボランティア ⑤ 沿岸部視察 ⑥ 閑上震災を伝える会語り部、名取市散策 ⑦ 学年報告会 ⑧ 文化祭にて紹介
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・関係各所との折衝
参加人数	40人
経費の総額・内訳概要	1,000,000円（交通費・宿泊費・資料作成費等）
成果と課題	【成果】 ベルマーク義援を行うことができ、心を届けることができた。4回目の訪問を迎え、互いに世代は変われど、「つながり」を紡いでいくことができた。 【課題】 費用が掛かる。日程が急を要する。
成果物	発表用パネル

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑨】※3

タイトル	防災マップ作り (DIG)
実施月日 (曜日)	9月25日 (金)
実施場所	竜南中学区
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名： 各担任 所属・役職等： 教諭
所要時間または 「コマ数×単位時間」	5コマ×50分
プログラムの カテゴリ、形式※4	9 校外学習・移動教室
活動目的※5	4 災害を想定した訓練
達成目標	災害に強い街にするために、現状を把握することができる。
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	① 調査地域区分 ② 実地調査 ③ 聞き取り調査 ④ 調査結果集約 ⑤ 分析・検討 ⑥ 文化祭・地域交流施設防災フェアにて紹介
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・学区地形図 ・マッピングシール ・カメラ ・印画紙
参加人数	195人
経費の総額・内訳概要	10,000円程度
成果と課題	【成果】 実際に自分の足で待ちを歩き、調査をしたことで、災害発生時にどのような状況になるのかシミュレーションを行うことができた。 【課題】 なし
成果物	防災マップ

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑪】※3

タイトル	防災講話
実施月日（曜日）	11月20日（金）
実施場所	各教室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名： 光田健 所属・役職等： 教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	2コマ×50分
プログラムのカテゴリ、形式※4	5 教科学習
活動目的※5	9 災害対応能力の育成
達成目標	公助の役割を学び、共助・自助の必要性を実感する
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 関係各所と調整 ② カテゴリー分け ③ それぞれの講師から防災について読み取る ④ 感想を書く
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	・すいか隊 ・岡崎市上下水道局 ・三河やろまい耐震化倶楽部 ・岡崎市役所市長公室防災危機管理課 ・中部電力 ・岡崎市東消防署 ・東邦ガス ・各種資料 ・パソコン ・プロジェクター
参加人数	195人
経費の総額・内訳概要	30,000円（講師謝礼等）
成果と課題	【成果】 関係各所から公助のために努力していることを聞き取ることができた。今後我々が共助・自助のために何を学んでいくべきなのかの方向性について考えることができた。 【課題】 なし
成果物	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑬】※3

タイトル	りゅうぼうの知恵
実施月日（曜日）	12月11日（金）以降随時
実施場所	教室 他
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名： 田村 舞 所属・役職等： 教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	6コマ×50分+1コマ×50分（発表）
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	2 防災に役立つ資料・材料作り
達成目標	災害時に身近にあるものを使って役立つものを作ることが可能であることを紹介できる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 災害時があると便利なもの、なくては困るものを考える。 ② グループに分かれ、発表の準備を進める。 ③ 手に入る材料で作れるものを調べる。 ④ 集めた情報を整理し、紹介したいものを選択する。 ⑤ 実際に使えるか、作って検証する。 ⑥ 防災フェスタにて紹介する。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	展示・使い方紹介・作り方を実演する。
参加人数	31人
経費の総額・内訳概要	
成果と課題	【成果】 どこの家庭でも手に入るものを使って、災害時に役立つものが作り出せることが分かり、その情報交換ができた。 【課題】 当日の発表に向けて、いかに工夫して分かりやすく伝えるか。
成果物	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑭】※3

タイトル	りゅうぼうハート（独居老人見守り）
実施月日（曜日）	12月11日（金）以降
実施場所	竜南中学区
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏名：光田 健 所属・役職等：教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	6コマ×50分＋1コマ×50分（発表）
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	3 災害に強い地域を作る
達成目標	地域の高齢者と交流を深め、防災につなげる
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 高齢者調査（社協との協力） ② 事前アポイントメント ③ 高齢者（独居老人）のお宅訪問Ⅰ ④ 訪問Ⅱ安否手ぬぐい配付 ⑤ 防災マップの作成
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	・学区社会福祉協議会委員さん ・手ぬぐい ・カメラ
参加人数	24名
経費の総額・内訳概要	10,000円
成果と課題	【成果】 子供たちが地域に出て、協力し合う関係を構築することができた。高齢者の方が災害発生時にどんなことに困る可能性があるのか聞き取り調査を行うことができた。 【課題】 訪問できた独居老人の家庭数を拡大していくことが今後の課題である。来年度は年賀状等の手書きのはがきなどで交流を試みたい。
成果物	記録写真 手ぬぐい

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑮】※3

タイトル	りゅうぼうの住処（避難所設営体験）
実施月日（曜日）	12月11日（金）以降
実施場所	教室・体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏名： 高出 和典 所属・役職等： 教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	6コマ×50分+1コマ×50分（発表）
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	5 災害を疑似体験
達成目標	避難所生活で自治組織の持つ役割を考え、モデルプランを提案する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 学校にある避難所グッズを確認する。 ② 避難所での自治組織の役割を考え、自分たちでモデルプランを作る。 ③ 避難所HUGを使い、実際に自分たちが考えたモデルプランでよいか考える。 ④ モデルプランを見直す。 ⑤ 発表用資料をまとめる。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・自治組織の役割ごとに班を分けて、内容を考える。 ・避難所HUGセット ・段ボールや衝立など
参加人数	25人
経費の総額・内訳概要	6,700円（避難所HUGセット）
成果と課題	【成果】 各班ごとに自治組織の中での役割を自覚し、プランを立てている。 【課題】 他の班と意見を交流させ、モデルプランを精査していく必要がある。
成果物	手作り簡易トイレ モデルプラン

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： 16】※3

タイトル	りゅうぼう食（非常食調理）
実施月日（曜日）	11月11日（金）等 数回
実施場所	教室 調理室 パソコン室 屋外
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 講師 氏 名： 小野内美紀 多様 所属・役職等： 教諭 すいか隊
所要時間または「コマ数×単位時間」	2コマ×50分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	10 災害時に常備食材を使って、手間をかけずにおいしく食べられる料理を作ったり、考えたりする。
達成目標	栄養やカロリーだけでなく、精神面の回復を考え、災害時に調理可能な料理を提供できるようにすること。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 岡崎市のすいか隊を招き、災害時の食についての考え方や非常食の作り方を学ぶ。 ② 非常食について、使える材料や調理器具、調理方法などについて各自で調べる。 ③ 調べたことを発表して、共有化し、非常食調理の計画を立てる。 ④ グループごとに調理する。 ⑤ 防災フェスタで全校、地域に広める。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・人材：男女共同参画推進サポーター「すいか隊」 ・計画に基づいた食材、調理器具
参加人数	24人
経費の総額・内訳概要	10,000円程度（家庭に買い置きしてあったもの）
成果と課題	【成果】 災害時に食べるものこそ、おいしいもの、温かいものの方が少しでも心が安らぐということが理解できた。ビニール袋やラップ、輪ゴムなどが非常食調理にとっても有効であること、また乾麺、ジャガイモなどの常備食材の活用法を学ぶことできた。 【課題】 実際の災害時の食材調理方法やガス・電気が止まった状態での調理道具の確保のことまで考えさせることが不十分だった。
成果物	非常食の調理レシピ

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑰】※3

タイトル	りゅうぼう袋（非常持ち出し袋の中身検討）
実施月日（曜日）	12月11日（金）以降随時
実施場所	教室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名： 谷川 大介 所属・役職等： 教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	6コマ×50分+1コマ×50分（発表）
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	1 遊び・楽しみながらの防災
達成目標	いのちを守るために非常持ち出し袋の中身を検討・準備することができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 被災時に必要となるであろう物品を考える。 ② その中から非常持ち出し袋に入れるものを厳選する。 ③ 100円ショップを活用し、すぐに用意できる非常持ち出し袋の中身を検討し、実際に用意する。
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	・持ち出し袋の中身 ・資料
参加人数	25人
経費の総額・内訳概要	5,000円程度（非常持ち出し袋の中身）
成果と課題	【成果】 東北訪問に参加した生徒が現地で聞き取ったことを基に、被災時に必要なものを検討し、実際に用意したことで防災への意識を高めることができた。 【課題】 非常持ち出し袋の中身を周知し、準備率を高めることが課題である。
成果物	非常持ち出し袋（各家庭）

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ⑩】※3

タイトル	りゅうぼうの命（救命講習・終了証取得）
実施月日（曜日）	12月11日（金）以降
実施場所	学校内 パソコン室（広い部屋）
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 講師 氏 名： 稲垣 悦男 岡崎消防署 大山様 所属・役職等： 教諭 消防士
所要時間または「コマ数×単位時間」	6コマ×50分+1コマ×50分（発表）
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	7 技術を身につける
達成目標	救急救命の方法を学び、地域の救命に役立てることができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	① 消防署にアポイントメント ② 会場確保（訓練装置が並べられるぐらいのスペースが必要） ③ 講習（AED・人工呼吸・心臓マッサージ・止血法） ④ 多様なシミュレーション ⑤ 終了証交付
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	・岡崎消防署 消防士 ・訓練用品（消防署よりレンタル） ・DVDプレーヤー ・レサシアン ・AED
参加人数	24人
経費の総額・内訳概要	3,000円（講師謝礼）
成果と課題	【成果】 心肺蘇生法や止血法についての知識が深まり、そのような場面に会ったときにどのように対処したらよいのか、自分にできるとその技能を身につけることができた。 【課題】 一度に受講できる人数に制限があり、時間と調整に労力がかかる。
成果物	個人に交付された修了証

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案と調整で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>防災教育チャレンジプラン一般枠での参加が2年目の今年度は、継続することに重きを置いた。そのためプランの立案については、それほど大きく苦勞することはなかった。「持続可能な地域社会の実現」のために中学生に何ができるのかを考え、その実現のための活動を「子供たちの意識」が「連続」し、その過程を通して学びが「深まり」、学んだことを地域で生かしたいと「広める」流れを構築していった。また学年教師全体が、どのように防災教育に取り組んでいきたいかをコツコツ話し合った。</p> <p>立案で苦勞をした点といえば、学校のカリキュラムの中でどのように実践を行っていくかという「時間的」な部分と、本校の防災教育担当が他学年にいて学年の様子あまり把握できていないということである。限られた時間の中で最大限効率的に活用することができるように苦心した。そのためにも、よく話し合いよりよい活動を考えていった。</p>
<p>準備活動で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>準備活動で苦勞した点は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域との準備 学校の思いを具現化するために地域に依頼したり、地域の思いを具現化するために学校が協力したりする時間の確保が苦勞した。 ・ 離れた地域との準備 東北復興支援訪問の際に、何をどのように準備するべきかや、新しい候補地の検討など綿密な準備が必要であった。 <p>工夫した点は、以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ベルマーク集め 地域から集めたベルマークと、学区内の学校が協働して集めたベルマークを集約・分類整理し、まとまった点数になったところで復興支援協力をさせてもらっている荒浜中学校にお渡しすることができた。 ・ 「広げる」部分 ユネスコスクール発表会などを利用して、本校の防災教育活動を多くに知ってもらう機会を設定することができた。
<p>実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>苦勞した点は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大人数であるということ 学年全体の約200人で動くことになり、想定通り進まないこともあった。 ・ 担当が他学年 本校の防災教育担当が他学年ということもあり、なかなか思うような防災教育が行えなかった。 <p>工夫した点はいかのとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の色を出す 学年の教師がそれぞれのもっている興味関心を生かし、防災カテゴリーを形成して授業を行った。このことで、子供たちの多様な課題意識にも対応することができた。

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	あ：亘理町立荒浜中学校 い：各市教育委員会 う：名古屋ユネスコ協会	あ：津波被害のすさまじさをお聞きし、新校舎の防災対策を見学させていただく。(義援ベルマーク寄贈) い：各種イベントへの参加調整・資料提供 う：ユネスコスクール活動発表会への参加調整
保護者・ PTAの組織	え：竜南中学校PTA	え：炊き出しの実施、東北復興支援訪問の支援
地域組織	お：上地学区総代会 か：若松東総代さん	お：地域との協働学習の連絡調整 か：若松東防災訓練の連絡調整
国・地方公共団体・ 公共施設	き：岡崎市役所 く：岡崎市南部地域交流施設	き：市長公室防災危機管理課から防災講話・各種イベントへの支援グッズ提供。岡崎市派遣の「亘理町支援職員」との交流の場の提供・調整 く：交流の場の提供
企業・ 産業関連の組合等	け：マイファーム亘理 こ：閑上震災を伝える会	け：津波被災農地復興支援ボランティアの実施場所提供 こ：震災語り部さんの派遣、連絡調整
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等	さ：NPO法人 「岡崎まち育てセンターりた」 し：上地学区社協委員会 す：すいか隊	さ：防災イベントでの出展場所提供 し：独居老人宅訪問支援 す：防災食指導・支援
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	せ：ボランティアスピリット賞	せ：活動成果を称賛する機関



6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<p>生徒の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会の実態を学ぶことで、自分の立場を明確にすることができ、「持続可能な地域社会の実現」に向けて、「自分ができること」を考えて行動することができるようになった。 ・ 本校が防災教育を行うようになって5年目を迎えた。このこともあって、生徒の中に本校の伝統の一つが「防災教育」という意識があり、とても意欲的に防災活動に参加している。東北復興支援訪問では36名が定員のところ100名を越す応募があった。また、学区で行われた防災訓練にも100名程度の参加が見られた。このことから防災活動に対する意識の高さが伺える。 <p>実践研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「切実感」を高めることが「課題意識の高揚」には不可欠であり、「課題意識の高揚」には「単元を貫く課題」の設定が不可欠であることが分かった。 ・ 防災活動の中でそれに関わる「人」、「コト」、「モノ」に出会うことで、自分の言葉に責任感と自信が湧き、「地域のために」と地域を大切に思う行動化へと大きく前進させることができた。 ・ 「竜南防災教育モデル」が策定されて1年目を迎えた。今まで本校の防災教育に携わっていた教員が今年度異動した。担当教員に異動があったとして同じ教育効果を目指すために策定した「竜南防災教育モデル」を試す機会となった。結果として、例年と変わらない今日いう効果を目指せたのではないだろうかと思う。
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>本校の防災教育の目玉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本校の防災教育の目玉は「東北復興支援訪問」である。この活動に参加した36名は、防災ということに関して大きく意識を変えることとなった。特に今回は、閑上地区に行き、震災を伝える会の語り部「菊池さん」に震災当時の状況を現地で話していただいた。当時の中学生たちがどのように被災し、どのように当時を生きていたのかをお聞きした。中には泣いている生徒もおり、切実感をひしひしと感じているように思えた。語り部に聞いた話の中に、「自分たちが泣いてしまうと大人たちが余計に悲しく思ってしまう。だから、大人たちの前では笑顔でいようと決め、陰で泣いていたそうです。その姿に私た大人はどれだけ救われたことか。」というものがあつた。この話は「中学生が地域の防災リーダー」として十分に期待される立場になれるという証拠である。この話を聞いたことで生徒の中に「地域の防災リーダー」としての自覚が芽生えたように感じた。
<p>今後の 継続予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域交流の輪をさらに広げていけるような活動を続けていきたい。 ・ 岡崎の学びを共にする子供たちとのつながりを広げていきたい。 ・ 「竜南防災教育モデル」を今後も継続して使用していき、「竜南防災教育モデル」の質をさらに向上させていきたい。 ・ 持続可能な地域社会の実現に貢献できる生徒を一人でも多く増やしていきたい。

7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

1 実践のとらえ

2011年3月11日、太平洋三陸沖を震源とした東北地方太平洋沖地震が発生した。この地震による災害を東日本大震災といい、東北から関東にかけての東日本一帯に甚大な被害をもたらした。以降、メディアを中心に「地震対策」や「防災・減災」といった言葉を目にすることが増えた。東北地方太平洋沖地震以降、多くの人が地震や防災ということを意識し始めたのではないだろうか。岡崎も数年後に巨大地震が発生すると言われている。南海トラフ巨大地震と言われているものであるが、これは南海トラフ沿いで発生する最大クラスの地震であると想定されており、一節には東北地方太平洋沖地震を超える被害をもたらすのではないとも言われている。南海トラフ巨大地震と東北地方太平洋沖地震との相違点は、震源域の広さである。東北地方太平洋沖地震の震源域が太平洋沖だったのに対し、南海トラフ巨大地震は太平洋沖から、太平洋側の日本列島の下にまで広がっている。この震源域の広さから、東日本大震災にはなかった震災による被害の甚大さが窺い知れる。

そこで必要になってくるのが、確かな防災の知識であり、非常時に自信をもって行動できることである。非常時には中学生が地域の重要な働き手とされている。それには、昼間には、高校生以上は地域にいないことが多く、災害時にもすぐに帰って来られるとは限らないためである。災害時に中学生がどれだけ動けるかで地域の生存率が変わってくると考えてもいいのではないだろうか。東日本大震災のときには、「釜石の奇跡」と言われ、岩手県の釜石東中学校のことが大きく取り上げられた。このことは、全国各地の防災教育の手本となっている。この釜石もそうであるが、東日本大震災で注目すべきことの一つは、「中学生が動くことによって、多くの命が救われている」という現状である。防災活動には、「中学生にもできること」と「中学生にしかできないこと」がある。それをよく把握したうえで生徒たちが自覚をもって、主体的に取り組めるように防災学習を進めていきたい。

1年間を通して、計画的で系統的な防災学習を行うことができるようになった。学年や学級、個人にいたるまで、高い防災意識をもたせることができている。しかし、防災学習というものは地域防災と連携されていないと意味がないとされている。そこで、本校の地域ではボランティア活動が幅広く行われており、そのボランティア活動に伝統的に多くの生徒が参加している土壌がある。そうした中で本校の防災活動と地域とをつなぐ役割を少しでも担えたらと思う。

2 防災教育の目標提案

- ① いのちを守る防災学習に関心を持ち、実社会を学ぶことで、切実感を抱きながら地域力向上の実現をめざして行動することができる。(関心・意欲・態度)
- ② 自助・共助・公助の視点を学ぶことで、地域社会をまもるそれぞれの立場の人々の役割を考え、自分が何をすべきかに思いを巡らせることができる。また、その成果を防災フェスタで適切な方法を用いて発表することができる。(思考・判断・表現)

(自由記述: 1/3)

- ③ 体験・聞き取り・書類調査等の手段を有効に活用し、自分の防災に対する学びの達成を目指すことができる。(技能)
- ④ 地域力の向上の重要性や防災学習の必要性を学び、私たちができることを理解することができる。(知識・理解)

3 実践

○東北復興支援訪問

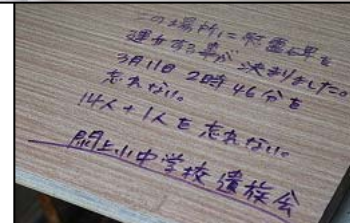
今年度は昨年度の防災教育担当者が異動したということもあり、「継続」をテーマに防災教育活動を行ってきた。その中で、重きを置いたのが東北復興支援訪問である。しかし、今年度は防災共同授業を行っていた大河原中学校が体育館改修のため交流が行えなかった。そこで、それに代わる新たな活動として、閉上地区の震災を伝える会の語り部さんの話を聞かせていただくことにした。初めての試みということで、どのようなお話が聞けるのか不安であったが、非常に切実感を抱くことのできる話であった。特に中学生の行動に関した話では、多くの本校生徒が涙していた姿が印象的であった。



語り部「菊池さん」の話を聞く生徒



当時の閉上中学校の生徒が書いた夢や思いの詰まった黒板と机



また、語り部さんによる話は閉上地区を巡りながらしてくださった。そのため、生徒・児童がどういった場所でどのような行動を取り生き延びたのかというところまで詳しく話をしてくださり、今後の防災活動の礎となる活動となった。さらには、閉上中学校の解体が始まったこともあり、津波被害に遭われた中学校を見ることができたのは今年度が最後となり、とても貴重な体験ができたと思っている。

今年度で4回目を迎える荒浜中学校との交流では、ベルマークの寄贈をさせていただいたり、新校舎の津波対策を見せていただいたりして学ばせていただいた。また荒浜中学校との生徒とも交流をすることができ、世代は変われども、変わらない「心のつながり」を感じることができた。

マイファーム亘理でのトマト収穫ボランティアでも、収穫活動に意欲的に参加する生徒の姿が印象的であった。収穫作業の前に、トマトが苦手であったり、農業の経験がなく嫌そうな

(自由記述: 2/3)

顔をしていた生徒も、トマト収穫をお手伝いする意義を感じ、楽しくお手伝いをさせていただくことができた。さらには、活動の前に岡崎市から互理町に派遣されている職員の方の話を聞かせていただいた。その中で「震災の状況を見て、何か互理の役に立ちたいと思い、自ら志願しました」というお話を聞かせていただいた。職員の方の思いの強さを感じることができ、またその思いが人と人とを繋ぐために必要なものであると感じることができた。

先輩たちの活動を見てきて自ら参加したいと志願し生徒たちだからこそ、多くの経験を積むことができた。遠方との連絡調整や資金、日程等様々なところで苦勞を伴う東北復興支援訪問ですが、今年度の経験を経て続けていくことの必要性、重要性を再認識することができた活動であった。



○若松東防災訓練

本校学区では毎年若松東学区防災訓練に多数の参加者が見られる。それを受けて、今年度は総代の方に、「防災訓練を手伝ってほしい」という依頼を直接受けた。生徒に募集をしたところ全学年合わせて100名の生徒が集まってくれた。「持続可能な地域社会の実現を目指す生徒の育成」を掲げて「地域の防災リーダー」を育成するために防災教育を行ってはいけるもののその実が伴っているのか不安なところであったが、今回の100名を超す防災訓練の参加を見て、「自分たちが地域を支えていく」という自覚を抱いているということが感じられた。この伝統がこれからも続いていくように防災教育を続けていきたいと思う。



ボランティア活動実績表 (提出用)

ボランティア活動を通して気づいたことや、感想を書きましょう。
見知らぬボランティア活動に参加して初めてのことや、学ぶことがありました。「だから、ために動いて、目的を成し遂げたい、相手の笑顔を見たい」ときの喜び。ボランティア活動で、学校だけでなく、地域に出ることも多いので、普段私たちが気が付かないところで地域の方に支えられていること。もちろん、防災の知識も増え、防災への意識も高まりました。ボランティア活動は直接はなくても、遠くからでもかかわるために、地域をよりよくしたいという思いを向かいかけた。今年学校が主催で募集しているけど、これからどうかが、地域のために、私も今、これを志す。これから積極的にボランティア活動に参加したいです。 33

本校が活用しているESDパソポートの感想。ボランティアを行うことで地域の方に支えられていること、これからも誰かのためになりたいと思うと書かれてある。

(自由記述: 3/3)